

分科会議事メモ (2-1 安定した食料生産：持続的な農業生産)**【プレゼン概要】**

内容は主に資料の通り。

- ・ CARD、SHEP、IFNA、灌漑、レジリエンス、生活改善等幅広い分野が関わってくる
- ・ スマート農業に関しても課題別研修等で取り上げている。
- ・ 筑波国際センター：比較的長期の研修を行う。大学の先生による講義、地方への研修旅行もプログラムに含まれる場合が多い。
- ・ 研修を通して、将来日本で修士、博士を取りたいという気持ちを持つ研修員も見られる。研修でできたつながりを通して、先生・研修員の紹介を行う事例もある。このような紹介を通すことは、人となりが分かるという面で受け入れて頂く先生にも有益であると同時に、研修員にとっては指導教官と事前に話をできるというメリットがある。

【意見交換】

問題提起：日本は稲作においてイニシアティブを取ってきており、今までの協力分野も稲作が多くを占めてきた。今後大学において人材育成をするという視点から見たときに、コメ以外の分野で受け入れたいという場合もあるのではないか。

- ・ 今後の AGRI-Net では稲作以外の分野も広く取り入れる。園芸作物、食用作物の両方を取り入れていきたい。
- ・ 途上国からも、稲作以外の分野で有望な人材がいるとの話も聞かれることがある。
- ・ モザンビークでは日本の強みは稲作だけであると思われており、日本で学ぶことはないという意見も聞かれた。

【気候変動に関して】

- ・ 気候変動に対するレジリエンスの分野において、気象データと作物モデルを組み合わせた研究なども求められている。
- ・ 気候変動は大きな課題である。作物の研究でも気候変動に的を絞ることは可能。
- ・ コロンビアの SATREPS では作物モデルや気象モデルを活用した研究・技術開発を行っている。

【短期研修から長期研修へのつながりの事例】

- ・ 山形大学では課題別研修（アフリカ地域稲作収穫後処理）の研修員を平成 20 年から受け入れている（平成 20 年から）。もともとは研修後、修士進学を意識するプログラムではなかった。しかし、短期の研修を経験したルワンダの学生が、長期研修のプログラムに応募したという事例が有る。

- ・ エチオピア短期研修経験者が弘前大学博士課程に入ったという事例もある。短期でお世話になった育種の先生に習う目的で、技プロの長期研修員として来ている。
- ・ 課題別研修「アフリカ小規模水稻コース」は普及員対象のコースであるが、レベルが格段に違う研究員が来る場合もある。9年間で5人ほどが再来日して筑波、広島、神戸大学等の長期研修を受けた。

【その他】

- ・ 新しいプログラムに対して、大学がどのように対応すれば良いのかが分からない。短期の研修が長期の研修にどのようにつながるのか検討する必要がある。
- ・ 研修と留学という全く異なる制度を組み合わせることは画期的である。JICA と大学との考え方の違い、研修と学位取得という異なる目的を持ったものをどのようにつなげていくかが焦点となる。学位取得とは研究のフィロソフィーを教えるものであり、すぐに社会実装できるものではない。社会実装に関しては学位取得後、JICA からのサポートが欠かせない。
- ・ 長期研修員の候補に関して、相手国政府に推薦を任せてしまうと、必ずしも優秀な人材を確保できない場合がある。